

## 病む日の教訓

五月十五日。津山市から阪神住吉の大島様に移った。風邪気味だと思つていると左上顎にある一本の虫歯の歯ぐきのあたりが痛みはじめた。昼席にはどうにかお話ししたが、その夜からは出来ない。

十六日。朝、近所の歯科医のところに行つて診察してもらうと、歯根膜炎をおこしている。歯根にばい菌が入つたのであるとて、虫歯の横手につめてあつたセメンスを出してくれた。そのあと大変な痛みで、氷のうをつけたきり、黙つて終日寝ていた。皆様があれほど待つていて下さつたのである。それに遠方から来て下さつた方、数年ぶりに初めて会つた方、そうした方にお話することが出来ないとは、まことに相すまぬことである。しかしどうにも出来ない。

今日は、台湾の上村穆史氏の夫人、悦子様が昨日大往生をとげられて、お葬式の日である。昨年二月に、台北病院へ御見舞に行つたのがこの世のなごりであつた。二人とお念仏に生きられた仲のいい夫婦であつた。上村さんの悲歎が思いやられる。悦子夫人は二度までも、本部の講習に來られたことは、せめてものありがたさである。今日はまた花岡くんの父上が往生されてお葬式の日である。往く春と共に、あまりに往生を急ぐ人が多い。

痛みは止まない。幸に広島から五島静子さんが來ているので、皆様と共にお世話を頂く。夜は、重症患者のように、氷をかえる為に寝ずの看護である。相済まぬことである。

十七日。今日で終りである。午前中無理して、豊島法姉の追弔会の奉白文を書く、午後追弔会にはおして参列した。厳かなありがたい追弔報恩会である。ありがたい方であつた。あの涙たたえて讃嘆されるお姿が見えるようである。その人亡き後の仏事の営みを、真実にするか否かは、その人の在りし日の歩みの如何による。たとえ、万卷の仏書をひもともくも、一切経を讀破するとも、如実の讃嘆門開けず、一片の死灰の学解に止まるならば、二乗を出ないであろう。信は明澄なる法でありつつ、熱き聖なる光炎である。

夜、相済まぬ思いに一席立つて語る。わずかに三十七度三分位の熱があるのに、汗、淋漓とし雨の如く、続いて悪寒おそい來り、歯痛烈しく、一時間にして鎗鎗として床に入る。

住吉の皆様にあまりに相済まぬので、大阪四日間を一日住吉に譲つて頂くことにして、十八日もここである。しかるに、十八日もまた痛みやまず、依然として語ることが出来ない。人間のはからいは、やはり駄目である。一日延しても同じことである。

「先生、有難うございます。よう、うちで寝て下さいました。」

「お話は聞かれなくても、色々と言のみ教え頂きました。」

「私どもの上におこる魔事ばかりを考えておりましたが、先生の上にも魔事がおきて來るのであります。聞かして頂ける日の有難さが思われます。」

「先生、長生きして下さい。」

聞き上手の、讃嘆上手の皆様は、聞かれない日にも、損はせぬ風情である。

「御法は聞かれる日に本気で聞いておけ、いつ聞かれないことになるか知れない。」  
何時もくり返すことではあるが、痛切に思われてならない。

十九日、正覚寺は私を残して皆と一緒に大阪に移る。はや子夫人と、五島さんが残って下さる。今朝も歯科医にゆく。毎日の如く孔の綿をとりかへるだけ。何だか昨日頃から、痛みが違って来て奥歯に何かはさまったのがとれないような、じつとしていられない痛みが加ったようである。帰ってから、一つの疑いがおこりはじめたので、午後、違った歯科医のところに行つて診察を乞うと、この人は、何の遠慮もせず、歯の正面に機械で穴をあける。そして、何かしら出している様子、すんでから、「これは歯の神経が腐つてそれがガスになつて出場がなく、その為にふくれて来たのです。腐つた神経をとりました。穴をふさいではいかん。これで治る」という。まこと痛みはだん／＼薄らいで、夕食がはじめて楽に頂ける。はや子夫人が「うれしい！」と叫ぶ。豆粒大の一本の歯、その歯の中の二三本の糸筋ほどの神経、それが腐つたわずかなガス。そのために五日間、大の男が床につき、氷のうをつけて人に厄介をかけ、多くの人の期待にそむいて迷惑をかける。

心に発生する心の腐つた愚痴のガス、無明界を出現して自損損他するは当然である。二十分の手術で治癒へ向かうに、何故に心の手術をさげんとするか。誤謬、不徹底、何時までたつも治ることなし。先の医師に毎日一人の患者も来るを見ず、後の医師、門前人の絶え間なし。実力は最大の宣伝なり。しかるに何故に精進して内を培わざる。貪欲の氣に入るが如くなでられて、法席に一生を空費しつつ助からぬ、いわゆ<sup>2</sup>る同行の氣の毒さ。この日、思うこと多し。二十日大阪支部に移る。